

パネル調査による社会的技量ルーブリックの縦断的活用

A Panel Survey of Longitudinal Use of Social Skills Rubrics

朝日大学大学院経営学研究科 教授 土井義夫

Graduate School of Business Administration, Asahi University, Professor DOI, Yoshio

朝日大学保健医療学部 准教授 林 卓史

Department of Health and Sport Sciences, Asahi University, Associate Professor

HAYASHI, Takafumi

朝日大学経営学部 教授 櫻木晋一

Department of Business Administration, Asahi University, Professor

SAKURAKI, Shinichi

京都橋大学経営学部 講師 西野毅朗

Department of Business Administration, Kyoto Tachibana University, Lecturer

NISHINO, Takero

概要：課題ルーブリックについては、レポートやプレゼンテーションを評価する多くの実践が報告され、研究も進められている。他方で、カリキュラムルーブリックの縦断的な活用実践についての報告は少ない。そこで本研究では、A大学B学部において、縦断的に活用されている社会的技量ルーブリックに注目し、パネル調査による活用結果について分析した。具体的には、①社会的技量ルーブリックを縦断的に用いることで、学生の自己評価はどのように変化したか、②社会的技量ルーブリックの組織的・縦断的な活用を教員はどのように捉えているかを明らかにした。そして、組織的・縦断的ルーブリックの活用の意義と課題を考察した。

Abstract : On the subject of rubrics, a number of practices have been reported positively evaluating reports and presentations and research on this subject continues. On the other hand, there have been few reports on the longitudinal use of rubrics in the curriculum. In this study, therefore, we have focused on the social skills rubrics used longitudinally in Faculty B at University A, and have analyzed the results of its use through a panel survey. Specifically, we have shown (1) how students' self-assessments changed as a result of using social skills rubrics longitudinally, and (2) how teachers perceive the systematic and longitudinal use of "Social Skills Rubrics". Then the significance and problems of the utilization of longitudinal rubrics were examined.

1. はじめに

1.1. 背景

21世紀の大学教育は、質的転換が期待さ

れるようになり、学士課程教育内において何ができるようになったかが問われ、学士力等の総合的な能力育成が求められるようになった。同時に大学教育の質保証のために、学修

成果の可視化が求められており、学生の能力をいかに評価し、育てていくかについては、大学教育における大きな課題となっている。

これらを背景として、高次の認知的能力や技能、態度などを測定するツールとしてのルーブリックが注目されている。実際、「教学マネジメント指針」（中央教育審議会大学分科会教学マネジメント特別委員会：令和2年1月22日大学分科会）においては、ルーブリックという言葉が「三つの方針」を通じた学修目標の具体化などの重要事項の箇所でも14回使われている。

ルーブリックの狭義の定義は「ある課題について、できるようになってもらいたい特定の事柄を配置するための道具」（Dannelle & Antonia, 2014）[1]とされる一方、「複数の評価観点について、典型的な学習成果を数段階に分けて記述された、学習者の行動を評価するための基準（表）」と広義に定義し、その種類について「課題ルーブリック」（狭義のルーブリックと同義）、「科目ルーブリック」、「カリキュラムルーブリック」、「機関ルーブリック」に大別し、体系的に関連づけるものもある（佐藤、2015）[2]。

ルーブリックを用いた評価研究としては、西村・中西（2013）[3]、松下他（2013）[4]、大倉他（2015）[5]、林（2015）[6]、中釜他（2015）[7]、春日（2015）[8]、辻（2019）[9]があるが、ルーブリックの狭義の定義にそった課題ルーブリック（レポート、プレゼンテーション）に関する研究がほとんどであり、組織的なルーブリックの活用には言及されていない。組織的なルーブリックの活用に関及した論考には藤木他（2015）[10]があるが、経年変化を捉えるような実証的研究とは言い難い。長期的な変容を見ることが出来る学生調査の論考としては、白川（2007）[11]があるが、特定のカリキュラム下における分析ではなく、かつルーブリックも使用されてい

ない。

ルーブリックの活用法について、山田・森他（2015）[12]は直接評価の基準として用いられる一方、学生が自身の学びを振り返ることができる間接評価の基準としても用いられることを示し、「＜量一質＞、＜直接一間接＞という視点から、どのレベルで学びを捉えているのかについて自覚的になることが肝要」と述べている。また、松下（2019）[13]は直接評価を間接評価によって代替することは困難としつつも、成長実感等学生の認知を把握するためには学生からの自己報告が必要であることを認めている。

以上を踏まえ本稿では、ルーブリックの広義の定義に則り、組織的かつ縦断的にルーブリックを間接評価の基準として活用し、学生自身の成長実感値の経年変化を可視化することの意義について、学生と教員双方の立場から、事例研究を通して探索的に明らかにしていきたい。なお、本稿で縦断的とは「1年から4年までの学修成果の経年変化」、組織的とは「学生・教員による取り組み」と定義する。

1.2. 研究課題と意義

本研究の研究課題は3つある。第1に、学生の学修成果は4年間でどのように経年変化していくかを、ルーブリックを用いて明らかにすることである。学生は単一の授業だけで成長するものではなく、体系化されたカリキュラムの中で成長していくものである。学生の成長を確認するためには個別授業における評価だけではなく、年次毎の総合的な評価が必要である。1年次から2年次、2年次から3年次、3年次から4年次にかけて、どの段階でどの能力が、どの程度伸びたか、あるいは伸びなかったかを明らかにしていくことが、より具体的な学修成果の可視化につながるであろう。第2に、経年変化の要因を分析

することである。成果を可視化し変化を捉えるだけでは、教育改善には結びつかない。重要なことは評価が伸びた部分と、伸びなかった部分について、その理由を検討することであり、それをカリキュラムや科目等の教育改善に役立てることである。第3に、組織的かつ縦断的なルーブリックの活用について教員側の認識を明らかにすることである。ルーブリックに基づき教育改善を行なうのは学生ではなく教員である。教員側がルーブリックを用いることに対してどのような認識を持っているか、そしてルーブリックによる評価の結果をどのように活用しようとするかを明らかにしたい。

以上3点の研究課題について事例研究を通じて明らかにすることができれば、組織的かつ縦断的にルーブリックを用いることの意義の一端を、学修成果の可視化と実質的な教学マネジメントへと結びつける具体的な方略を得るという観点から明らかにすることができるだろう。

2. 調査方法

2.1. 研究対象の概要

本研究ではA大学B学部（社会科学領域）を事例研究対象とする。当該学部では、学生の学びを支えるために2005年以降、「社会的技量ルーブリック」を作成し、活用している。ここで言う社会的技量とは、「職業人として社会生活に適応し、それぞれの職場で求められる技量を学科独自にまとめたものの総称」である。A大学の建学の精神は、「国際未来社会を切り開く社会性と創造性、そして、人類普遍の人間の知性に富む人間を育成すること」を謳っており、社会的技量の分析は社会性の能力の向上を測るという位置づけとなる。

2005年B学部C学科の学科会議で、学生の能力向上と、文部科学省等の変化の方向を

考慮した手法として、Coplin (2003) [14] が提案する米国大学の資料抄訳およびCovey (1989) [15] の検討を開始した。これを踏まえ2009年には、「学生の社会的技量獲得による社会人化をサポートする」ことがC学科の教育目標として位置づけられた。2013年には、学内組織であるカリキュラム検討委員会にて学部内の評価体系の検討を開始し、「社会的信頼を得るための学習・社会生活指導面でのルーブリックの整備と、関連授業科目の明確化」が目指された。そしてCoplin (2003) が提案する10分類をもとに、就職委員による加筆修正を行ない、2016年に10分類36項目からなる「社会的技量ルーブリック」が完成した。

現在は、社会的技量の獲得をカリキュラム上の教育目標の中心の1つに位置づけ、学年進行に伴い社会的技量がどの程度身についているのか、学生自身が自ら確認する機会を毎年設けている。具体的には、必修科目である基礎演習Ⅰ（1年次）、キャリア形成Ⅰ（2年次）およびキャリア形成Ⅱ（3年次）の授業内で社会的技量ルーブリックを用いた自己評価を学生が行ない、自己評価に対するコメントを演習担当教員が付記し、本人に指導を行なっている。2017年度入学学生からはキャリア形成のフォローとして4年次も正規の授業外でキャリア形成の追跡という形で実施した。演習担当教員が変更される1年次から2年次への移行タイミングでは、前任担当教員から後任担当教員へ引き継がれるため、社会的技量ルーブリックは学生の学修カルテ（教育指導記録）としても機能している。

2.2. 調査の概要

1) 調査1：学生調査の概要

本研究では、卒業年度を迎え縦断的に比較可能となった2017年度入学生を対象とする（図1）。

| | 2020年度入学 | 2019年度入学 | 2018年度入学 | 2017年度入学 | 2016年度入学 | 2015年度入学 | 2014年度入学 |
|----------------|----------|-----------------------|-----------|-----------|-----------|-----------|-----------|
| キャリア形成 | 4年 | | | 2020年7月※2 | - | - | - |
| キャリア形成Ⅱ | 3年 | | 2020年5月※2 | 2019年5月 | 2018年5月※1 | 2017年5月※1 | 2016年5月※1 |
| キャリア形成Ⅰ | 2年 | 2020年5月※2 | 2019年5月 | 2018年5月 | 2017年5月※1 | 2016年5月※1 | - |
| 基礎ゼミⅡ 基礎ゼミⅠ | 1年 | 2020年11月※2 2019年9月 | 2019年7月 | 2018年7月 | 2017年7月 | 2016年7月※1 | - |

※1 試験運用 ※2 Web実施

図1 学内でのルーブリック運用状況（実施年月）

調査に当たっては、表3、4に示した「社会的技量ルーブリック記入票」（3点満点による4件法）をA3表裏1枚に印刷し、上述の授業内で学生に配布し、履修学生が直接手書きする方式をとった。ただし、4年次においては、コロナ禍のため印刷物に直接記入する方式をとることができず、記入票をGoogleフォームを用いた調査票に置き換え、インターネットを用いて回答する方法を採用した。

調査日程について、1回目は2017年7月、2回目は2018年5月、3回目は2019年5月に上述した授業内で評価方法を説明し、30分程度の記入時間を設け、学生による自己評価を実施した。4回目は、執筆メンバーで経年変化をより完全に把握するためWebアンケートを実施し、2020年7月9日から10月1日の期間に動画で評価方法を配信し、動画内で記入時間を設け実施した。

結果、2017年度入学のB学部生120名（2018年3月時点）のうち、自己評価を回収できたのは1年次103名、2年次114名、3年次111名、4年次72名であった。回収した回答のうち、4回のうちいずれかの回答が欠落している学生と、研究利用の可否について「同意しない」と回答した学生を標本から外した結果、最終的な分析対象としての標本数は43名（有効回収率38.2%）となった。

2) 調査2：教員調査の概要

2019年9月のB学部のFD学習会において、「社会的技量ルーブリック」の取り組みの振り返りを行ない、合わせてアンケート調査を実施した。B学部全教員28名のうち、当該FD学習会開催後のWebアンケートの回答数は14であり、研究利用の同意を得られた12（有効回収率42.9%）を分析対象とした。

今回の分析対象として活用した設問は、社会的技量に対する重要度とルーブリックの捉え方を把握し、講義への反映の仕方を明らかにするために、以下の3問とした。設問1「社会的技量は大事な能力だと思いますか。」（多肢選択式）（非常にそう思う・そう思う・どちらでもない・あまりそう思わない・全くそう思わない）、設問2「ルーブリックの説明を聞いて、どのようなことを考えましたか。」（記述式）、設問3「これを受けて次年度、講義の進め方を変えようと思いましたが（その理由）。」（記述式）である。

3. 調査結果

3.1. 学生調査の分析結果

調査結果より、2017年度入学生の1年次から4年次までの自己評価における集計結果について、分類別と項目別に分析する。分析にあたっては、各学年の平均評価点と学年間の差を算出した。合わせて、学年間の有意差があるかどうかを確認するために、一元配置分散分析とBonferroni検定による多重比較も行なった。

まず、分類別の分析結果である（表1）。1-2年次では、すべての分類の平均点が伸び、統計的な有意差も認められた。総合計の有意差も認められた（一元配置分散分析、Bonferroni検定、 $p<.001$ ）。2-3年次では、総合計の有意差は認められず、すべての分類の平均点がかろうじて伸びているものの、有意差が確認された分類は、10分類中1分類となった。

表1 社会的技量ルーブリックの自己評価集計結果 (10分類)

| 社会的技量 | 平均評価(点) | | | | F(3,42) | p | 多重比較検定 |
|------------|---------|------|------|------|---------|------|-----------------|
| | 1年 | 2年 | 3年 | 4年 | | | |
| 1. 職業倫理 | 1.61 | 1.88 | 1.94 | 1.97 | 18.28 | .000 | 1<2,3,4 |
| 2. 身体的技術 | 1.66 | 1.91 | 1.91 | 1.84 | 4.62 | .000 | 1<2,3 |
| 3. 口頭表現術 | 1.40 | 1.57 | 1.71 | 1.62 | 7.30 | .000 | 1<3,4 |
| 4. 書面表現術 | 1.29 | 1.54 | 1.67 | 1.70 | 21.45 | .000 | 1<2,3,4 2<4 |
| 5. チームワーク術 | 1.60 | 1.81 | 1.93 | 1.89 | 9.22 | .000 | 1<2,3,4 |
| 6. 対人影響術 | 1.02 | 1.20 | 1.32 | 1.54 | 15.86 | .000 | 1<3,4 2<4 3<4 |
| 7. 調査技術 | 0.91 | 1.17 | 1.25 | 1.42 | 14.68 | .000 | 1<2,3,4 2<4 |
| 8. 数字解釈術 | 1.16 | 1.40 | 1.44 | 1.41 | 9.69 | .000 | 1<2,3,4 |
| 9. 論理的思考術 | 1.13 | 1.42 | 1.51 | 1.68 | 20.03 | .000 | 1<2,3,4 2<4 |
| 10. 問題解決術 | 1.47 | 1.72 | 1.78 | 2.02 | 23.91 | .000 | 1<2,3,4 2<4 3<4 |
| 総合計(平均) | 1.32 | 1.56 | 1.65 | 1.71 | 31.02 | .000 | 1<2,3,4 2<4 3<4 |

3 - 4年次では総合計の有意差が認められず(一元配置分散分析、Bonferroni 検定、 $p<.05$)、平均点が下がった分類も4つあった。分類別でみると、有意に伸びたものは2つに限られた。また、1 - 4年次の差を分析した結果では、総合計については有意差が認められた(一元配置分散分析、Bonferroni 検定、 $p<.001$) が、「2. 身体的技術」のみ有意差が認められなかった。一方、「7. 調査技術」と「8. 数字解釈術」では、1 - 4年次に有意差が認められるものの、4年次の平均点は3点満点中1.4点と全分類の中で最も低いことがわかる。

次に、項目別の分析結果(表2)である。平均点の差に注目すると、1 - 2年次はすべての項目で平均点が伸びているが、2 - 3年次には4項目の平均点が下がり、3 - 4年次には、10項目の平均点が下がっていることがわかる。また、平均点が有意に伸びている項目数を数えると、1 - 2年次は13項目、2 - 3年次は0項目、3 - 4年次は4項目となった。総合計に注目しても、総合計平均点こそ伸長し続けているものの、有意差が認められるのは1 - 2年次と1 - 4年次のみである。以上より、学生の成長が年を追うごとに鈍化していることがわかる。

1 - 2年次には有意差がでなかったものに

注目すると、「うまくアピールできる」は3 - 4年次に有意に伸長しており、3 - 4年次の平均点の向上は全項目の中で最も高いことがわかる。また「自分のお金を管理する」、「うまくアピールできる」、「専門性を身に着けた分野では細部の違いを見つけられる」、「解決策を実行する」は3 - 4年次のみ有意差が確認された。次に分類別の結果と項目別の結果を比較してみる。分類別の有意差が1 - 4年次に出なかった「2. 身体的技術」に注目すると、中でも「見かけを良くする」という項目の1 - 4年次の有意差がでないことがわかる。しかしこの項目は、1 - 2年次には有意に伸長しており、2 - 3年次に平均値が伸びなくなり、かつ3 - 4年次にかけて低下していることがわかる。分類別の有意差が1 - 4年次ででたものの4年次平均点が低かった「7. 調査技術」は、中でも「商用データベースが使える」、「図書館を使うことができる」の平均点が低い。また同じく「8. 数字解釈術」については、全項目が軒並み中程度の平均点しかないことがわかる。

表2 社会的技量ルーブリックの自己評価集計結果 (36項目)

| 社会的技量 | 社会的技量ルーブリック項目 内容 | 平均評価(点) | | | | F(3,42) | p | 多重比較検定 |
|------------|---------------------------------------|---------|-------|-------|-------|---------|------|-----------------|
| | | 1年 | 2年 | 3年 | 4年 | | | |
| 1. 職業倫理 | (ア) 自分に活を入れられる(難しい資格試験に合格するストレス耐性を含む) | 1.14 | 1.58 | 1.53 | 1.56 | 7.30 | .000 | 1<2,3,4 |
| | (イ) 正直である信用を得る(自分のミスは正直に謝る小さなウソをつかない) | 1.72 | 2.02 | 2.19 | 2.14 | 9.44 | .000 | 1<2,3,4 |
| | (ウ) 挨拶をする、時間を守る | 1.95 | 2.07 | 2.12 | 2.16 | 1.84 | .143 | |
| | (エ) 自分の時間を管理する(課題や仕事の納期) | 1.77 | 2.09 | 2.09 | 1.91 | 4.02 | .009 | 1<2,3 |
| | (オ) 自分のお金を管理する(小遣いや生活費の管理) | 1.47 | 1.65 | 1.77 | 2.07 | 10.91 | .000 | 1<3,4 2<3,4 3<4 |
| 2. 身体的技術 | (ア) 堅実である(健康と体の管理) | 1.79 | 1.91 | 1.91 | 1.72 | 0.79 | .504 | |
| | (イ) 見かけを良くする(身だしなみには気を遣う) | 1.60 | 2.07 | 2.02 | 1.88 | 6.81 | .000 | 1<2,3 |
| | (ウ) 読みやすいメモがとれる(授業時間ノートを取る) | 1.58 | 1.77 | 1.81 | 1.93 | 3.86 | .011 | 1<4 |
| 3. 口頭表現術 | (ア) 1対1で対話できる(他人と対話できる) | 1.67 | 1.98 | 2.16 | 2.07 | 6.16 | .000 | 1<3,4 |
| | (イ) 多人数に向けて発表できる(PowerPointで発表できる) | 1.47 | 1.56 | 1.77 | 1.77 | 4.27 | .007 | 1<3,4 |
| | (ウ) ビジュアルで表現できる(ビデオ作品が作れる) | 1.07 | 1.16 | 1.21 | 1.02 | 1.73 | .164 | |
| 4. 書面表現術 | (ア) 過不足なく書ける(レポートが書ける) | 1.14 | 1.51 | 1.72 | 1.72 | 12.81 | .000 | 1<2,3,4 |
| | (イ) 文章を編集・校正できる(文章を見直すことができる) | 1.19 | 1.56 | 1.70 | 1.79 | 11.82 | .000 | 1<2,3,4 |
| | (ウ) Wordを使いこなす(ビジネス文書の作成) | 1.65 | 1.70 | 1.86 | 1.91 | 4.15 | .008 | 1<4 |
| | (エ) メールやネットワークを使いこなせる(メールを活用できる) | 1.40 | 1.65 | 1.79 | 1.86 | 8.77 | .000 | 1<3,4 |
| | (オ) 画像処理ソフトが使える(チラシやポスターが作れる) | 1.07 | 1.28 | 1.28 | 1.21 | 3.35 | .021 | 1<2,3 |
| 5. チームワーク術 | (ア) 仲間と良い関係を築く(一緒に頑張る) | 2.05 | 2.16 | 2.28 | 2.30 | 2.71 | .048 | |
| | (イ) 仕事が完結する様に段取りができる | 1.28 | 1.56 | 1.67 | 1.49 | 8.57 | .000 | 1<2,3 |
| | (ウ) 仲間を指導できる(課題や仕事) | 1.49 | 1.72 | 1.84 | 1.88 | 4.34 | .006 | 1<3,4 |
| 6. 対人影響術 | (ア) うまくアピールできる | 0.74 | 0.86 | 0.98 | 1.44 | 20.53 | .000 | 1<4 2<4 3<4 |
| | (イ) うまく調整できる | 1.12 | 1.33 | 1.42 | 1.53 | 4.73 | .004 | 1<4 |
| | (ウ) 社会貢献への参加意欲 | 1.19 | 1.42 | 1.56 | 1.65 | 8.62 | .000 | 1<3,4 |
| 7. 調査技術 | (ア) 図書館を使うことができる | 0.67 | 0.81 | 0.84 | 1.12 | 5.37 | .002 | 1<4 |
| | (イ) 商用データベースが使える | 0.14 | 0.37 | 0.53 | 0.77 | 8.09 | .000 | 1<3,4 2<4 |
| | (ウ) インターネット検索ができる | 1.79 | 2.26 | 2.30 | 2.33 | 13.43 | .000 | 1<2,3,4 |
| | (エ) 情報収集ができる | 1.02 | 1.26 | 1.33 | 1.47 | 3.32 | .022 | 1<4 |
| 8. 数字解釈術 | (ア) 数字を見ただけで傾向が分析できる | 0.95 | 1.26 | 1.40 | 1.42 | 11.23 | .000 | 1<2,3,4 |
| | (イ) 数表から図やグラフに変換できる | 1.14 | 1.35 | 1.37 | 1.33 | 2.29 | .082 | |
| | (ウ) Excelなどのソフトで分析できる | 1.37 | 1.58 | 1.56 | 1.49 | 2.14 | .098 | |
| 9. 論理的思考術 | (ア) 矛盾点を指摘できる(ウソを見抜ける) | 1.21 | 1.65 | 1.79 | 1.86 | 13.43 | .000 | 1<2,3,4 |
| | (イ) 専門性を身に着けた分野では細部の違いを見つけられる | 0.79 | 1.05 | 1.12 | 1.51 | 11.09 | .000 | 1<4 2<4 3<4 |
| | (ウ) 知識を活用できる | 1.28 | 1.49 | 1.56 | 1.63 | 4.72 | .004 | 1<3,4 |
| | (エ) 目標達成までのプロセスを評価できる | 1.26 | 1.49 | 1.56 | 1.72 | 6.98 | .000 | 1<3,4 |
| 10. 問題解決術 | (ア) 問題発生に気付く、原因を特定できる | 1.84 | 2.16 | 2.14 | 2.23 | 6.91 | .000 | 1<2,3,4 |
| | (イ) 解決策を模索できる | 1.28 | 1.63 | 1.77 | 1.93 | 15.95 | .000 | 1<2,3,4 2<4 |
| | (ウ) 解決策を実行する(PDCAサイクルを回して解決できる) | 1.28 | 1.37 | 1.42 | 1.91 | 23.11 | .000 | 1<4 2<4 3<4 |
| | 総合計(平均) | 47.56 | 56.33 | 59.35 | 61.72 | 31.02 | .000 | 1<2,3,4 2<4 |

3.2. 教員調査の分析結果

設問1「社会的技量は大事な能力であると思いますか」について、「非常にそう思う」が3名、「そう思う」が7名、「どちらでもない」が0名、「あまりそう思わない」が1名、「全くそう思わない」が1名であった。設問2「ルーブリックの説明を聞いて、どのようなことを考えましたか」について、設問1で「非常にそう思う」と回答した教員は、「具体的な項目ごとに学生の目標設定ができる点、その進捗(改善)状況を把握して指導できる点でルーブリックは効果的である」「フィー

ドバックの必要性を改めて強く感じた」「定性評価でしか評価できないようなスキル(技量)を評価できるものとして有効に活用したい」と述べた。一方、設問1で「あまりそう思わない」と回答した教員は、「今後の活用方法等については、個人的にまだ未確立のため、検討課題として認識している」との回答であった。また「全くそう思わない」と回答した教員は、「自己評価(意識)の指標であり、学生に自信をつけさせる根拠となり得る。能力とは、他者がみて客観性をもって認められる」と記述している。

設問3「これを受けて次年度、講義の進め方を変えようと思いましたが（その理由）」については、3名の教員が肯定的な回答をした。具体的には、「学生の状況（足りない点）を把握することができ、それを参考にして講義を進める方が学習効果が高くなると考えられる」「大きな変更はないが、より意識的にフィードバックを心がけたい」「私が受け持っている社会調査法では、調査技術の部分で情報収集やデータベースの活用に生きるワークを取り入れることを検討したい。また、専門演習においては、課題発見→解決策検討→プレゼン作成及び提案を通じてチームワーク術、問題解決術、書面作成術、口頭表現術の技量を向上させるべく、パワポでの資料作成と発表の頻度を上げ、フィードバックしていく予定」であった。

4. 考察

結果から読み取れる考察について、本研究課題に沿って以下に記述する。

第1に、学生の自己評価が4年間でどのように変化していくかについてである。これについて、本事例では初年次に全ての評価分類の成長実感が得られるものの、以降は成長実感が得られる項目とそうでない項目に分かれ、かつ成長度合いは低下していくことが明らかになった。成長すれば自ずと得点上の伸びしろが小さくなるため、成長が鈍化することは当然と考えられるかもしれないが、4年次になっても平均点が満点の半分を下回るような評価項目もあり、必ずしも伸びしろだけの問題ではないと考える。またB学部において初年次教育の改善が功を奏した結果、1-2年次の成長実感が高まっているとも考えられる。今後2-4年次の教育改善を行いつつパネル調査を継続することで、教育改善の成果を測定することもできるだろう。

第2に、経年変化の要因についてである。

上述の通り、初年次教育の効果や伸びしろの大小という要因も考えられる一方、学生生活に依る要因も大きいと考える。例えば、「自分の時間を管理する（課題や仕事の納期）」ことについて、1、2年次は多くの科目を履修し課題に追われることも多いが、3、4年次は就職活動に備えて履修科目を少なくする傾向があり、結果的に課題に関する時間管理の意識が低下している可能性がある。また、「うまくアピールできる」が3-4年次に特に伸長していることは、就職活動の中で自身をアピールする経験を多く積んでいるからではないだろうか。最後に「図書館を使いこなす」が3-4年次のみ有意に伸長している点は、卒業研究の影響が大きいだろう。ただし本項目は、「商用データベースを使うことができる」と共に4年間を通じて平均点が低いことが明らかになっており、教育課程の中で十分に指導できていないことも大きな要因と考えられる。以上より、学生の経年変化の要因は、教育課程と学生生活の両面から分析し、今後の改善策を検討する必要があるといえよう。

第3に、組織的かつ縦断的なルーブリックの活用に関する教員側の認識についてである。調査の結果から、ルーブリックの活用法や利点について理解している教員は肯定的な認識を持つ一方、ルーブリックの活用法が不明瞭である点や活用法が適切でないと考える教員は否定的な認識を持つことが明らかになった。以上からルーブリックの適切な活用法を教員に伝えていくことが、ルーブリック活用の肯定的な認識を醸成することにつながると考えられる。教員回収率が42.9%と全体の半数を切っていることで、否定的意見が出なかったことが予想される。またルーブリックの結果が教員側にフィードバックされることは、日頃の授業改善や学生へのフィードバックを増やすことにつながる可能性を有し

表3 社会的量尺ルーブリック記入票 (表面)

| | | 学 科 | 学 年 | ゼ ミ | 学籍番号 | 氏 名 |
|-----------------------------------|---------------------------------------|-----|---|--|---|---|
| | | ゼミ | | | | |
| 2017/05 Ver.1.0d | | | | | | |
| 社会的量尺点 | 内容 | 点数 | 0 | 1 | 2 | 3 |
| 1. 職業倫理 (職業倫理を確立する) | (ア) 自分に活を入れられる(難しい資格試験に合格するストレス耐性を含む) | 点 | 難しいことは皆できないのだから、自分だけできないわけではない。大学生としてどんな勉強をしたらよいか、どんな資格を取ればよいかかわからない。 | 社会人として必要なビジネス能力やWord/Excelなどの資格を取得したことで自分にもできる自信を持つことができた。 | 大学で専門知識を学んだことを証明するファイナンシャルプランナー、ITパスポートなどの資格取得やアクティブラーニングに取り組み、成果を上げるまでくじけずに頑張っている。 | 宅建や公認会計士試験など、大学で学んだ専門知識を証明する高度な資格や卒業研究、論文に、チャレンジして長期計画的に取り組み成果を達成することができた。 |
| | (イ) 正直である信用を得る(自分のミスは正直に謝る小さなウソをつかない) | 点 | 自分のミスや過失でやってしまったことを、自分からは連絡できない。あるいはウソをついてしまうことがある。 | 自分のミスや過失のときに連絡が遅れたり、言い訳して、時には小さなウソをついてしまう。 | 自分のミスや過失に気がついたときは関係者にすぐ連絡し、事実を話して謝罪できる。 | 自分のミスや過失に気付いた時には関係者に直ちに連絡し、事実を話して謝罪する。その上で、この事によって問題が波及する恐れのある部署や対応方法について考えることができ、秘密を誓った時以外は、うそをつかない。 |
| | (ウ) 挨拶をする、時間を守る | 点 | 近所の人、友人、教員など、知っている人とも挨拶をしたことがない。授業の開始や約束の時間によく遅れる。 | 顔見知り以外の人に挨拶するのは苦手だ。授業開始時間や約束の時間はほぼ守れるが、5回に1回くらいは遅刻する。 | 見知らぬ人にも必要な時は笑顔で挨拶できる。まず約束の時間に遅れることはない。 | いつも周囲から笑顔と元気の挨拶を誉められる。約束の時間の5分以上前に到着して、約束の目的を確認し、手落ちがないか確認している。 |
| | (エ) 自分の時間を管理する(課題や仕事の納期) | 点 | 課題はいつも提出期限ギリギリに提出する。遅れれば提出すれば問題ないと思っている。 | 課題の提出は、3回に1回くらいは期限ぎりぎりになり、遅れることもある。 | 課題提出は、ほとんどの場合期限内に余裕を持って完成させ期限内に提出している。 | 課題は、期限内に十分な余裕を持って完成させ、何度か見直しして完成度を上げて提出する。 |
| | (オ) 自分のお金を管理する(小遣いや生活費の管理) | 点 | 毎月、月末になるとお金が無くなり、食費などを切り詰めている。友人などに借金がある。 | 時々だが、月末にお金が足りなくなることがあり、親に前借したこともある。自分が毎月大目くらめしているかは知っている。 | 小遣いや生活費が不足しないように、記録をつけているので毎月の出費額を知っている。突然の支払いも考えており、お金が足りなくなることはない。 | 卒業後の収入見込みや、生活費、税金などの支出金額を試算することがある。将来の生活設計を具体的な金額で予想できる。 |
| 合計 | 点 | 点 | 点 | 点 | 点 | 点 |
| 2. 身体的技術 (身体的技術の獲得) | (ア) 堅実である(健康と体の管理) | 点 | 朝なかなか起きられない。朝食を食べない日が週に3日以上ある。 | 授業には、夜ふかしや病気で遅刻、欠席したことは半期(前期・後期)に2回以下である。 | 毎朝遅くとも8時には起床しているのが、授業に遅刻することはない。健康や食事には気を付けてバランスの良い生活をしている。欠席は半期に1回以下である。 | 就寝時間と起床時間を決めて休日以外に朝寝坊することは無い。適切な運動と食事のバランスには気を付け、病欠も数年間無い。 |
| | (イ) 見かけを良くする(身だしなみには気を遣う) | 点 | ジャージや部屋着で外出することがある。髪を何カ月も切っていない。歯や爪が汚れていることがある。 | 外出時には、カジュアルであっても、他人に見られて恥ずかしくない服装を意識している。 | 外出時にはおしゃれでなくても清潔な服を身につけ、無精には見えないように、気をづかっている。 | 外出先のTPOに気を遣い、自分の好みより場所や目的に合った清潔な服装と身だしなみを心がけている。 |
| | (ウ) 読みやすいメモがとれる(授業時間ノートを取る) | 点 | 授業のノートを取るの面倒だ。ノートのとる目的と書き方がわからない。 | 授業のノートは取っているが、後で読み返して意味が解らないことがある。そのままになっている。 | 授業のノートはきちんと取り、内容が解らないことは調べたり質問する様になっている。 | 授業のノートはきちんと取り、疑問な点や質問しようとする項目を整理して、先生に質問したり、調べたりして、解るまで努力する。 |
| 合計 | 点 | 点 | 点 | 点 | 点 | 点 |
| 3. 口頭表現術 (口頭でコミュニケーションする) | (ア) 1対1で対話できる(他人と対話できる) | 点 | 難しい話は嫌いだ。相手の何を言っているのか意味が解らないことがある。知らない人と話せない。 | 身近な人とは、世間話だけでなく真面目な話もできる。知らない人と天気や部活などのスモールトークができる。 | 知らない人との会話で、相手の話に興味を持ってお互い盛り上がったことがある。自分の知らない知識を得たり、考え方が変わり良かったと思える経験がある。 | 他人の相談に乗る感謝された経験がある。自分と違う意見の相手に自分の意見を伝えられた経験がある。 |
| | (イ) 多人数に向けて発表できる(PowerPointで発表できる) | 点 | PowerPointは授業では習ったが使うことはできない。大勢の前では絶対にやりたくない。 | PowerPointを使ってプレゼンテーションは作ることができるが、大勢の前で発表する自信は無い。ゼミで発表できる様に頑張る。 | PowerPointを使ってプレゼンテーションを作成し、授業やゼミで発表したことがある。 | PowerPointを使ってプレゼンテーションを作成し、授業やゼミで何度も発表したことがある。 |
| | (ウ) ビジュアルで表現できる(ビデオ作品が作れる) | 点 | 動画・ビデオは見ただけで、編集などできない。 | 動画・ビデオを撮ったことはある、編集して作品を作ったことはない。 | 動画・ビデオを編集して、自分で楽しんでる。 | 動画・ビデオを編集して、作品を何本も作ったことがあり、チャンスがあれば発表したいと思っている。 |
| 合計 | 点 | 点 | 点 | 点 | 点 | 点 |
| 4. 書面表現術 (文書でコミュニケーションする) | (ア) 過不足なく書ける(レポートが書ける) | 点 | レポートは書いてあれば良いと思っている。相手に伝えることまでは、考えていない。 | レポートは他人が読むものなので、書いてある文章が読める様にできるだけでいい。字を綺麗に書くようにしている。 | レポートでは丁寧に書くだけでなく、まず主張を書いて、その次にその主張の根拠や論理の筋道を示すように心がけている。 | レポートは論理の筋道を意識するだけでなく、読み手が誰かと言うことを考え、その人の共感を得よう工夫している。 |
| | (イ) 文章を編集・校正できる(文章を見直すことができる) | 点 | 自分で作成した文章を見直すのは面倒だ。ミスが見つかるのは遅だと思っている。 | 自分で作成した文章を見直し、難しいミスのない文章になる様に努力している。 | 自分で作成した文章を見直し、 TYPOや、誤字・脱字などほとんどのミスを見つけて修正することができる。 | 自分で作成した文章を見直し、ミスをなくすだけでなく、誤字や置文を多めせず、読みやすかつ前提な主張が理解できる読みやすい文章になる様に努力している。 |
| | (ウ) Wordを使いこなす(ビジネス文書の作成) | 点 | パソコンでの文字入力を多くの指を使ってできない。字をそろえたり、罫線で表を作るのは苦手だ。 | パソコンで文書を作成することはできるが、ビジネス文書は作ったことがない。 | ビジネス文書の文例集を見ながらパソコンである程度のビジネス文書ならミス無く作成することができると思う。 | 代表的なビジネス文書は作成した経験があるので、どんなビジネス文書でも正確に作成できる。 |
| | (エ) メールやネットワークを使いこなせる(メールを活用できる) | 点 | 友人とLINEでやり取りするのでメールは使えない。 | 授業でメールを使っただけで、友人以外の人とメールでのコミュニケーションは経験がない。 | メールには件名、相手と自分の名前などのビジネスメールの必要項目は必ず書いている。また、送信する前に宛先が間違っていないか確認している。 | ゼミの調査研究などで、企業や自治体の人たちとメールで情報交換をしているので、メールの書式や言葉使いには気を付けている。また、毎日メールチェックをしている。 |
| | (オ) 画像処理ソフトが使える(チラシやポスターが作れる) | 点 | Wordで文字を入力するのが限界。 | Wordを駆使して図や写真を入れるなどチラシやマニュアル程度の物は作れる。 | イラストレータやフォトショップなどの画像処理ソフトを使って、チラシやポスターを作った経験はある。 | 画像処理ソフトを駆使して、写真やイラストを使った本格的なポスターを何度も作り、公の場所に掲示された経験がある。 |
| 合計 | 点 | 点 | 点 | 点 | 点 | 点 |
| 5. チームワーク術 (いろいろな人たちと協働する) | (ア) 仲間と良い関係を築く(一緒に頑張る) | 点 | 友人を作る事は苦手だ。チームでの作業ではいつも逃げていくことがある。 | 3人以上のチームで自分もチームの一員として、一緒に目標を達成したことがある。 | 共通の目的を持った仲間とチームを作り、それぞれの能力を活かして目的をやり遂げたことがある。 | 共通の目的を持った仲間と、それぞれの能力を活かして課題をやり遂げ、一人では味わえない達成感を味わったことがある。 |
| | (イ) 仕事が完結する様に段取りができる | 点 | 友人たちと一緒に行動するのは苦手だ。友人と分担して何かをやるのは、計画するのも行動するのも苦手だ。 | 友人たちと一緒に旅行や遊びに行くときは人任せにせず事前に必要なモノや事をチェックする。時々計画をたてる。 | 友人たちと一緒に旅行や遊びに行くなど、率先して計画をたて時間進行に応じ何が必要かを考え、必要に応じて仲間へ指示した経験がある。 | 災害復旧のボランティア活動等自発的な活動のために仲間を集め移動や宿泊の手配などを率先してやった経験が3回以上ある。 |
| | (ウ) 仲間を指導できる(課題や仕事) | 点 | どちらかというと、一人で行動する。人に知識や情報など何かを教えたことはない。 | 部活の後輩たちなどに基礎的なことを教えたことがあり、得意な分野は指導することができる。道を尋ねられたり自分の知っているやり方を聞かれたら、丁寧に説明できる。 | チームの仲間と目標に向けて一緒に練習する中で、チームの力を結集するために努力している。自分にできることを必要とする人に継続的に教えた経験が、3回以上ある。 | 自分にできることを必要とする人に継続的に教える中で、自分が新たなことに気がついた経験を持っている。教えることは教えられることでもあることを何度も経験している。 |
| 合計 | 点 | 点 | 点 | 点 | 点 | 点 |
| 社会的量尺点 | 内容 | 点数 | 0 | 1 | 2 | 3 |

パネル調査による社会的度量ルーブリックの縦断的活用

表4 社会的度量ルーブリック記入票 (裏面)

| 社会的度量点 | 内容 | 点数 | 0 | 1 | 2 | 3 |
|-----------|--------------------------------|----|---|---|---|--|
| 6. 対人影響術 | (ア)うまくアピールできる | 点 | 授業の共同制作も面倒なので黙って見ていた。 | 共同制作の役割を決める時に、自分の得意な仕事をやらせて欲しいと主張したことがある。 | 就職活動やアクティブラーニング等で知らない会社や団体に直接連絡して、自分の知りたいことややりたいことを伝えた経験がある。 | 就職活動やアクティブラーニング等で自分や仲間の長所を伝えて、相手の協力を引き出し目的を達成した経験がある。 |
| | (イ)うまく調整できる | 点 | 何人かで共同作業をするのは面倒なので、参加しないようにしている。 | 大学のサークルやボランティア活動で、役割を与えられれば、それに真面目に取り組むことができる。 | 大学のサークルやボランティア活動などで、チーム毎の役割が決められた時に、より効率的に作業が行えるように、チーム連携や作業分担の調整役をかってた。 | グループの運営などで、作業全体と各々のスキルを理解した上で、積極的に発言して全体の仕事の分担を調整することができる。 |
| | (ウ)社会貢献への参加意欲 | 点 | みんなでやる仕事はさぼりたい。見て見ぬふりをして参加しないようにしている。 | 大学のサークルやボランティア活動など、頼まれた仕事は嫌がらずに手を貸している。 | 自分の得手不得手にかかわらずみんながやりたがらない妻方の仕事も率先して行い、必要に応じてチームの弱点を補っている。 | 大学のサークルやボランティア活動などの様々な社会貢献活動には積極的に参加し、指導的な立場で活動を行っている。 |
| 合計 | | 点 | | | | |
| 7. 調査技術 | (ア)図書館を使うことができる | 点 | 図書館で本を借りたことは今まで無いが、せいぜい1、2回だ。 | レポート課題を書くために、参考文献を図書館で探してメモをとったことがある。 | 開架式の図書館で、ブラウジングでレポート等に役に立つ本を見つけた経験がある。 ※ブラウジング=本棚を眺め、気になる本を取り出して読むこと | 大学や公立の図書館で、必要な知識を調べる必要があるとき、分厚い検索を使ってあるいは司書の手助けを得て、知識を手に入れることができる。 |
| | (イ)商用データベースを使える | 点 | 商用データベースを使ったことは無い。 | 大学図書館の商用データベースを利用したことがある。 | レポートの内容を大学図書館の商用データベースから引用したことがある。 | 毎ナビやリクナビなどの就職情報を検索し、企業のホームページや財務情報とデータベースの記事とあわせて、企業業績を判断することができる。 |
| | (ウ)インターネット検索ができる | 点 | キーワード検索はいつもしているが、複雑な検索はしない。 | インターネットを使って、調べたい会社や店の電話番号、住所を探し出すことができる。 | インターネットを使って、特定の情報を集め、その中の信頼できる情報か、否かを見分けることができる。 | インターネットを使って特定の事象や知識の情報を集め、その中の信頼できる情報を見分けることができる。 |
| | (エ)情報収集ができる | 点 | 日記や手帳などに、自分の行動を記録したことは無い。 | 部活の練習日誌、授業出席記録など、大切な自分の行動は記録している。 | 自分の行動を記録するだけでなく、いろいろなところから得た大切な知識や経験、アドバイスを、ノート等に記録している。 | 自分が記録した、部活の練習日誌や、いろいろなところから得た知識やアドバイスの情報メモを、特定の視点から整理分析できる。 |
| 合計 | | 点 | | | | |
| 8. 数字解釈術 | (ア)数字を見ただけで傾向が分析できる | 点 | 体重や学習状況など、様々な変化を数字の変化を使って考えたことはほとんどない。 | 毎期の成績(GPA)の変化や、資格試験などの点数で、自分の学習状況を確かしている。 | 大学のサークルやボランティアの会計報告、あるいは自分の収入と支出を一定期間記録して、今後赤字になるかそうなるかという関係性が想像できる。 | 会計報告の数字などから、全体の増減にいくつかの要因が関係しているとき、どの要因の変化が最も大きく全体に影響しているかが分かる。 |
| | (イ)数表から図やグラフに変換できる | 点 | 数表と図やグラフの関連が解らない。 | 数表を図やグラフに変換してプレゼン資料を作ることができる。 | 複数の数字を見て、その意味することを適切な図表に変換して表現できる。データの性質に応じて、図表を選び、表題や単位、注書きが付けられる。 | 複数の数字を見て、その数字の意味することを解りやすく適切な図表で表現し、今後の変化予測や対応方法などを説明することができる。 |
| | (ウ)Excelなどのソフトで分析できる | 点 | Excelで、合計・平均・最大・最小の最低限の関数だけは使える。 | Excelで、簡単な表やグラフを作成することはできる。 | Excelで、SUMIFなど多くの関数を駆使して、アンケートのデータを集計や会計報告をすることができる。 | Excelのピボットテーブルなどの高度な機能を使いこなして、データ集計や統計分析の報告書が作成できる。 |
| 合計 | | 点 | | | | |
| 9. 論理的思考術 | (ア)矛盾点を指摘できる(ウソを見抜ける) | 点 | もっともらしい話は信じてしまう。 | 人の話の出所が一次情報(事実)か、うわさ話かに注意して話を聞いている。 | 相手の主張の根拠が何なのか、それが事実なのか、比較なのか、因果関係なのか、好みなのかを意識して話を聞いている。 | 会話の中で矛盾点を指摘することができる。議論をするときは主張の前提となる条件を常に意識している。 |
| | (イ)専門性を身に着けた分野では細部の違いを見分けられる | 点 | 小さな違いを見つけるのは難しい。授業や議論に質問があることはほとんどない。 | 自分で作成した文章を見直しても、ミスを全て見つけるのは難しい。授業や議論、アクティブラーニングの時には、毎回質問を考えるようにしている。 | 自分で作成した文章を見直し、誤字・脱字などほとんどのミスを見つけることができる。専門分野の知識を活かし、相手に興味を持ち、適切な質問ができる。 | 自分で作成した文章を見直し、ミスをなくすだけでなく、読みやすい文章に編集することができる。例えば就職活動では、専門分野の知識を活かし、なぜそれが存在するのかだけでなく、なぜ存在しないのかを質問できる。 |
| | (ウ)知識を活用できる | 点 | 新しい仕事を覚えたり、機械を使いこなすことは苦手だ。 | 話しを聞いた上で、手伝ってもらったなどの指導を受けることでなんとか仕事を覚え、機器を活用できる。 | 話しを聞くだけで、仕組みを想像することができるので、何度かトライすれば活用できる。 | 話しを聞いた上で、それをヒントに、それ以上に効率的な仕組みを作り上げることができる。 |
| 合計 | | 点 | | | | |
| 10. 問題解決術 | (ア)問題発生に気づき、原因を特定できる | 点 | 何が問題なのか判断できない。(忘れ物、遅刻のような)同じような失敗をよく繰り返す。 | 何か変だと思うが、問題を発見できない。失敗をした時には、その原因を考えなければいけないと思っている。 | 問題があることに気づくが、原因を見つけることは難しい。失敗の原因をいくつか考え、ある程度絞り込むところまで、特定ができない。 | 問題発生に気づき、問題点を探ることができ、失敗の原因を探り、さらにその失敗がなぜ起こったのかという原因を特定することができる。 |
| | (イ)解決策を模索できる | 点 | 失敗した時にどうしてよいか分らない。失敗しないように対策を考えたことはない。 | 失敗をしない様にするために、インターネットで検索したことがある。失敗を今後繰り返さないよう解決策を、先生や先輩に指導を受けたことがある。 | 正常な状態と、問題が起きている状態を比較して相違点を見つけ、今後の対策(プラン)を考えようと努力している。 | 現在起きている現象と正常時の状態を比較するなど、自分の経験や収集した情報を駆使して問題点をあぶり出し、問題点に応じた対策(プラン)を考え出すことができる。 |
| | (ウ)解決策を実行する(PDCAサイクルを回して解決できる) | 点 | 失敗しても特に今後の対策を考えたことはない。誰か他の人が何とかしてくれると思っている。 | 失敗して解決策を教えてもらった時は、ちゃんと実行するように意識する。しかし、重要なことも紙に書いたりせず、頭の中に記憶すれば良いと思っている。 | 学業など重要なことについて、実行している解決策がうまくいっているか記録をとり一定期間で振り返り、十分でなければさらに問題点と解決策を繰り返し考え実行している。 | 学業など重要な事項については、実行している解決策がうまくいっているか記録をとってさらに問題点と解決策を考えるだけでなく、本当に十分なのか第三者にもチェックしてもらっている。 |
| 合計 | | 点 | | | | |
| 社会的度量点 | 内容 | 点数 | 0 | 1 | 2 | 3 |

社会的度量 総合計
1~10の合計を集計してください。
総合計 点 /108

社会的度量ルーブリックは、あなたの社会人としての価値や力を数値化して見える化したものです。

1. この結果を見てあなたが感じたことを書きなさい。

2. あなたが一年以内に優先して取り組まなければならない項目を2つ書きなさい。
① - () 例 【5.0】 - (ウ)
② - ()

3. 社会的度量を高めるために、あなたがしなければいけないことは何ですか。

ていることも明らかになった。一方で個別教員の努力には限界があり、組織的な議論を通じてカリキュラムの改善などに結び付けていく必要性もあると考えられる。

5. まとめ

パネル調査による社会的技量ルーブリックの縦断的活用を図るため、キャリア系授業を中心に学部レベルで全数調査し、一定の経時的な変化を追うことによって学習成果の経年変化を可視化した。

まず、本研究の限界について述べる。第1に標本対象の限界である。今回は1年次から4年次まで一貫して調査することができた初めての学年として2017年度入学生を対象としており、他年度の入学生は対象としていない。入学年度間の比較ができていないため、このパネル調査がどこまで一般化できるかどうかを検証することは難しい。また今回の対象者が4年次に回答したものは大学がオンライン授業を導入したコロナ禍中のものであり、特殊性が否めない。1年次から3年次は質問紙によって行なっていた調査が、4年次のみWeb調査になっていることも何かしらの影響を与えているかもしれない。第2に分析上の限界である。本調査の評価基準で書かれたルーブリックによる回答は、学生の自己評価であり、順位尺度に比べて比較的に客観性は高いといえる。このため1年生から4年生まで同じルーブリックを用い、パネル調査として成長の過程を点数の差分としてみることには、一定の意味や意義があるといえる。ただし、教員調査でも明らかになった通り、自己評価だけでなく客観評価のツールとして活用していかなければ、教員の理解も得られないだろう。また、今回は変化に関する量的分析にとどまっており、要因の分析が仮説にとどまったものになってしまっている点も分析上の課題である。

以上を踏まえ、今後の展望を述べる。第1に、標本数を増やすために今回の結果を学生や教員にフィードバックし、本研究の意義や有用性について理解を深めていきたい。第2に、学生調査を他年度入学生にも継続実施し、入学年度間の比較を行なうことで結果の信頼性を確認したい。第3に、教員と学生の面談時に、教員からの評価欄を「社会的技量ルーブリック記入票」に追加し、自己評価だけでなく客観評価も行ない、評価ギャップについても分析したい。第4に、評価の変化理由に客観性を持たせるため「社会的技量ルーブリック記入票」に評価理由を記述する欄を設け、定性分析を行なえるようにしたい。もしくは学生に対するインタビュー調査を行なうことにより、得点変化の要因に関して客観的なデータを得られるようにする。第5に、本結果をうけたカリキュラムや科目の改善を継続的に行なうことにより、どのように評価が変化していくかを明らかにし、教育課程の改善がどのように学生の成長に結びつくかを継続的に検証していきたい。

参考文献

- [1] Dannelle D. Stevens., & Antonia J. Levi : INTRODUCTION TO RUBRICS: An Assessment Tool to Save Grading Time, Convey Effective Feedback, and Promote Student Learning. 2012
佐藤浩章、井上敏憲、俣野秀典 訳：大学教員のためのルーブリック評価入門、玉川大学出版部、2014
- [2] 佐藤浩章：具体例で学ぶルーブリック評価とその作成手順、看護人材育成 12 (5)、pp.77-85、2015
- [3] 西村まりな、中西良文：ルーブリックを用いた協同技能の評価に関する検討、三重大学教育学部研究紀要 64、pp.363-371、2013

- [4] 松下佳代、小野和宏、高橋雄介：レポート評価におけるルーブリックの開発とその信頼性の検討、大学教育学会誌 35 (1)、pp.107-115、2013
- [5] 大倉義文、古野みはる、黒木まどか、栢豪洋：授業プログラム改善のためのルーブリック評価指標の活用法、日本歯科衛生教育学会雑誌 6 (1)、pp.48-60、2015
- [6] 林透：山口大学におけるケース・スタディ 質保証のためのマネジメントに着目して (シンポジウム 学士課程教育における共通教育の質保証)、大学教育学会誌 37 (1)、pp.45-50、2015
- [7] 中釜達朗、市川隼人、保科貴亮：TED トークを教材としたルーブリック評価による日本語プレゼンテーション教育、工学教育 63 (2)、pp.73-78、2015
- [8] 春日美穂：大学生の日本語表現技術におけるルーブリックの活用 詳細な項目のルーブリック使用の可能性、國學院大學教育開発推進機構紀要 (6)、pp.101-108、2015
- [9] 辻香代：議論型エッセイを評価するルーブリックの考案と検討 モジュールを礎としたライティング技法に着目して、大学教育学会誌 40 (2)、pp.64-71、2019
- [10] 藤木清、川嶋太津夫、関田一彦、芹澤高斉、小林至道：ルーブリックの組織的導入と活用について (第 37 回大会ラウンドテーブル)、大学教育学会誌 37 (2)、pp.101-106、2015
- [11] 白川優治：学生パネル調査から明らかになった日本における初年次教育の可能性 (シンポジウム 学士課程に初年次教育をどう組み込むのか)、大学教育学会誌 29 (1)、pp.16-21、2007
- [12] 山田嘉徳、森朋子、毛利美穂、岩崎千晶、田中俊也：学びに活用するルーブリックの評価に関する方法論の検討、関西大学高等教育研究 6、pp.21-30、2015
- [13] 松下佳代：学習成果とその可視化、中央教育審議会大学分科会教学マネジメント特別委員会 (第 6 回) 資料 1、文部科学省、2019
- [14] Bill Coplin. : 10 Things Employers Want You to Learn in College: The Skills You Need to Succeed. Ten Speed Press, 2003
- [15] Stephen R.Covey. : The 7 Habits of Highly Effective People. 1989
川西茂 訳:7つの習慣、キングベアー出版、1996